

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520568

研究課題名(和文) 近世・近代の奥州海村をめぐる環境と文化に関する歴史学的研究

研究課題名(英文) Historical studies about environment and culture of the area along the shore of the Tohoku district in early modern and modern

研究代表者

高橋 美貴 (TAKAHASHI YOSHITAKA)

東京農工大学・大学院農学研究院・准教授

研究者番号：90282970

研究成果の概要(和文)：本研究では、①近世から近代にかけて未整理のまま三陸沿岸に残されている歴史史料(本研究では、岩手県大船渡市三陸町綾里の千田基久兵衛家に残された膨大な史料群を主たる素材とした)の保存・整理・データベース化による奥州海村研究の基盤整備と、②それらの共同研究を通して多面的な視角から奥州海村の環境と文化に関する歴史学的研究を進めてきた。その成果は平成22年5月に斎藤善之・高橋美貴編『近世南三陸の海村社会と海商』として清文堂出版から刊行した。合わせて、東日本大震災で被災した調査対象史料の確認・保護作業も行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is two of the next. ①The first was to save, sort and list-make the history document which is left at the Sanriku coast with being unsorted, as making base of the study for the sea village of Oshu. This study pushed forward the work mentioned above, for the Chidas documents of Ofunato-shi, Iwate. ②The second was to push forward historical study of environment and culture in the Oshu Sea village.

We published these results of research as a learned book (Yoshiyuki Saito, Miki Takahashi edition "Society of the sea villages and wealthy merchants of the sea in early modern Minami-Sanriku" Seibundo-publish) in May, 2010.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2008年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 2009年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：日本近世史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：地域史、資源、生態、生業、生活文化、巨大経営体

1. 研究開始当初の背景

奥州の海村を対象とした研究は、これまで近世を中心として相応の蓄積をもっている。そこでは、水産業とそこで生産された水産物の加工・流通を基幹産業とした社会として、その歴史的なイメージが作り出されてきた。

しかし、たとえば三陸沿岸地域の景観を想起しただけでも明らかなように、奥州海村は、海川の生業文化とともに、山林資源を背後に抱えた豊かなヤマの生業・生活世界とその加工・流通の世界とを持った。しかも、そのような海・川と山の世界が、製塩燃料や水産物

の加工燃料などの供給や物質循環の面で、相互に強く結びついてきた。

また、沿岸地域に流れ込む多数の河川下流域には、湿地やその開発によって生み出された耕地が拡がり、これまた独自の環境世界とそれに対応した生業文化・生活文化を蓄積してきたのである。

折しも、三陸沿岸地域では、「森は海の恋人」運動が展開され、海・川・山といった地域の環境全体と人びとの生活・生業・文化との相関関係の再生がめざされている。本研究は、海村という空間を構成する環境的条件の多様性に応じた、人びとの生活・生業文化を発掘することを通して、従来の奥州海村イメージの再検討を行おうとスタートした。

また、奥州海村の研究は、従来、どちらかといえば、当該地域に散在する膨大な家文書の一部を虫食いの的に利用したものが多く、その文書群の全体像を十分捉えきれないまま行われてきた傾向が少なくない。本研究では、可能なかぎり史料の整理・撮影に協力してくれる協力者を募りつつ、史料群の全点デジタル化を目指して作業を進める方針を立て出発した。

2. 研究の目的

本研究は、(1)奥州海村部に残された膨大な歴史資料の整理およびデジタル・データ化と目録化、および(2)それら史料群の分析を通じた奥州海村イメージの再検討を目的とした。

(1)では、若手研究者にも参加してもらいながら、当該地域に残された膨大な史料群を整理し、なおかつデジタル・データ化していくためのスキルの向上と継承を意図しながら、奥州海村研究の基盤整備を進めた。幸い、本研究の研究連携者たちによって、すでに「宮城方式」と呼ばれる史料の撮影・整理スタイルがほぼ確立されていた。本研究では、それを活用・共有しつつ、奥州海村地域に残された近世・近代史料の保存とデジタル・データ化を進めることとした。

一方、(2)では、三陸沿岸地域に残された歴史史料を活用しつつ、海村といえば、水産業を基幹産業とした地域社会像を描いてきた従来の奥州海村イメージを塗り替える作業を進めた。海村を構成する環境的要素は、海・河・山のほか耕地・湿地など多様であり、本研究では、そのような多様な環境的条件に応じた生活・生業の中身と変容の過程とを、近世から近代を見通しつつ明らかにすることを計画した。そのような作業を通して、近世から近代にかけて海村という空間と社会がもった歴史的な推移と歴史像を改めて提示することができれば、と考えたのである。

3. 研究の方法

奥州の海村地域には、近世から近代に至る

膨大な未整理史料が残存している。その意味で、奥州海村研究は、新たな研究の余地を多く残しているといえよう。本研究では、これらの膨大な史料群を研究利用に供しうる状態にしていきながら、若手研究者にも随時研究に加わってもらうことで、新たな海村研究のあり方を模索することを試みた。

具体的には、奥州海村部に残された膨大な歴史史料の整理およびデジタル・データ化と目録化を進めた。前述したように、このような膨大な歴史史料の整理・撮影方式として、すでに「宮城方式」と呼ばれる方法論がほぼ確立されているが、本研究では、それを活用・共有しつつ、奥州海村地域に残された近世・近代史料の保存とデジタル・データ化、そしてそれらを共有することによる分析作業を同時並行で進めた。

具体的には、下記のような作業を順次進めてきた。

(1)2008年度

①岩手県大船渡市綾里砂子浜の千田基久兵衛家文書の整理・写真撮影を8月16～20日まで、地元郷土史家などの協力も得つつ20名ほどの参加者を得て行った。ただし、資金不足から目録作成については、連携研究者らにデータを配布し、各自作業を進めてもらい、それを統合する形をとった。

②それと並行して、本科研で共同研究を進めてきたメンバーとともに、研究成果の出版に向けての準備を進めた。これまた経費不足から、メール上で原稿を提出しあい意見交換を行いつつ、高橋美貴・斎藤善之・泉正人・籠橋俊充・井上拓巳・鎌谷かおる・佐藤大介・平川新による八本の論文が完成、高橋・斎藤が編者として、「はじめに」と「おわりに」を分担執筆して構成を整えた。2009年3月6日には仙台で会合を開き、論集の体裁をほぼ決定した。

(2)2009年度

①引きつづき、岩手県大船渡市綾里砂子浜の千田基久兵衛家文書の整理・写真撮影を8月18～21日まで、地元郷土史家などの協力も得つつ20名ほどの参加者を得て行った。目録作成は前年度同様、連携研究者らに配布のうえ各自作業を進めてもらうとともに、3月25～26日には、一部メンバーが仙台に集合のうえ目録作成を行った。

②それと並行して、本科研で協力研究を進めているメンバーとともに、共同研究の出版に向けての準備を昨年度に引きつづき進めた。高橋美貴・斎藤善之・泉正人・籠橋俊充・井上拓巳・鎌谷かおる・佐藤大介・平川新による八本の論文を納め、高橋・斎藤が編者となった論文集の

校正を終えた。

(3)2010年度

- ①これまで同様、岩手県大船渡市綾里砂子浜の千田基久兵衛家文書の整理・写真撮影を8月20日～23日に実施した。そのうえで持ち帰ったデジタルデータを連携研究者らで共有し、史料の目録化作業を進めた。
- ②このような目録化の作業と並行して、三陸沿岸に残された歴史資料の分析を共同で進め、その成果を平成22年5月に斎藤善之・高橋美貴編『近世南三陸の海村社会と海商』として清文堂出版から刊行した。

4. 研究成果

本研究では、(1)奥州海村研究の基盤整備として、近世から近代にかけて未整理のまま三陸沿岸に残されている歴史史料として、とくに岩手県大船渡市三陸町綾里の千田基久兵衛家文書を中心とした保存・整理・データベース化を進めた。

また、これと合わせて、(2)すでに目録化が住んでいる宮城県石巻市北上町地域に残された海村史料群などを利用しながら、本研究のテーマでもある、多面的な視角から奥州海村の環境と文化を歴史学的に復元する研究を共同で進めた。その成果は平成22年5月に斎藤善之・高橋美貴編『近世南三陸の海村社会と海商』として清文堂出版から刊行することができた。

なお、本科研の仕上げとして、平成23年3月13～14日に史料調査と会合を行い、本科研に基づく調査・分析を総括する予定であったが、3月11日の東日本大震災によって調査地が潰滅的な被害を受けたため、急きょ計画を中止した。このため、その段階の予算残額を繰り越しのうえ、調査受入先の状況を見極めつつ、連携研究者らの協力を得て、これまで整理・保存を行ってきた史料群の確認と保護活動を実施した。具体的には、平成23年7月8日～10日に、これまで最大の調査拠点となってきた岩手県大船渡市三陸町砂子浜・千田基久兵衛家を訪ね、蔵および家屋に所蔵されている歴史資料を搬出・整理するなどの確認・保護作業を行った。

同家は高台に位置しながらも、母屋が床上浸水に見舞われるなどの被害を受けたが、文書類は蔵の二階に所蔵されていたため、幸いにして被害を免れた。一方、今回の津波では、石巻市北上町地域の資料群は壊滅的な被害を受け、デジタル・データのみが残るといった状況になっており、「宮城方式」のような大量の史料の整理・撮影を処理できる史料調査法の有効性を、史料保存上の利点とともに再確認することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 高橋美貴、「近世漁業を通してみた生業と魚介類」、中澤克昭編『人と動物の日本史2 歴史のなかの動物たち』、査読無、2009、164-187
- ② 高橋美貴、「俵物増産と海士集団の出漁—佐渡国海士町海士を事例として—」、『歴史』、査読有、112輯、2009、66-90

〔学会発表〕(計1件)

- ① 高橋美貴、「近世における回遊資源の変動と地域漁業—豆州内浦地域を事例として—」、近世史フォーラム・10月例会、2009年10月10日、大阪市立難波市民学習センター

〔図書〕(計1件)

- ① 斎藤善之・高橋美貴編、清文堂出版、『近世南三陸の海村社会と海商』、2010、全341頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 美貴 (TAKAHASHI YOSHITAKA)
東京農工大学・大学院農学研究院・准教授
研究者番号：90282970

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

平川 新 (HIRAKAWA SHIN)
東北大学・東北アジア研究センター・教授
研究者番号：90142900

斎藤 善之 (SAITOH YOSHIYUKI)
東北学院大学・経済学部・教授
研究者番号：00196023

篠宮 雄二 (SHINOMIYA YUUJI)
中部大学・人文学部・准教授
研究者番号：60293677

佐藤 大介 (SATO DAISUKE)
東北大学・東北アジア研究センター・助教
研究者番号：50374872

鎌谷 かおる (KAMATANI KAORU)
神戸女子大学文学部・非常勤講師
研究者番号：20532899

蝦名 裕一 (EBINA YUICHI)
東北大学・東北アジア研究センター・助教
研究者番号：70585869